

# ドゥルーズ＝ガタリ資本主義論の再検討

神戸夙川学院大学観光文化学部准教授 原 一樹

## 【目次】

1. はじめに
2. D&G による資本主義批判の特徴
3. D&G による資本主義理解の位置付け
4. D&G による資本主義批判の意義と課題
  4. 1 D&G 哲学以外の資本主義批判理論との関係
  4. 2 「資本主義への抵抗」の存在論的基礎付け
  4. 3 「多様体の存在論的優位性」と「生成変化」に関する議論状況と課題
5. 終わりに

## 1. はじめに

『アンチ・オイディプス』と『千のプラトー』<sup>1</sup>から数十年、資本主義社会や国際情勢全般は大きく変貌した。ドゥルーズ＝ガタリ（以下 D&G）に影響を受けた理論も多岐に亘り、彼らの資本主義理解と批判の孕む可能性を見定め批判的に継承・発展させる為には、聊かの労力が必要である。そこで本稿では、（特に英語圏での）D&G 解釈者や先行理論家の議論を広く参照しつつ、改めて D&G の資本主義論から継承すべき課題を抽出する作業を行う。D&G の議論の概略をまずは振り返ろう。

『アンチ・オイディプス』において資本主義は、それ以前の社会が持つ欲望・信念・行動に関する諸コードを「脱コード化・脱領土化」し、一般的等価物たる貨幣を基礎とする内在的公理系を打ち立てるもので、常にその運動を再開し続けるとされる。資本主義は「脱コード化・脱領土化」により人間を他人への個人的従属や様々な社会的拘束から解放するが、「脱コード化・脱領土化」した「流れ」（欲望や貨幣の流れ）を公理系へと回収するという限界を持つ。資本主義を超克するには「脱コ

ード化・脱領土化」の運動を更に「遠くに進む」ことが必要で、この振る舞いが革命的だとされる。

「いかなる革命の道があると言うのか。・・・世界的市場から撤退することか・・・。それとも逆方向に進むことか。即ち、市場・脱コード化・脱領土化の運動の方向に更に遠くまで進むことか。・・・諸々の流れはまだ十分に脱領土化しておらず、脱コード化もしていない・・・。ニーチェが言ったように・・・更に遠くまで進むこと、＜過程を加速する＞ことだ。」（『L'anti-Œdipe』以下【ACE】 p. 285）

『千のプラトー』では、D&G が先進的に看取していた「国際化された資本主義」の現状分析や、資本主義と国家との関係に関する議論が充実している。『千のプラトー』は D&G の包括的な哲学を展開する著作なので、資本主義への抵抗戦略として提出される着想もより多彩な文脈で利用可能な抽象度の高い概念として提出される。本稿では各概念の内実には立ち入れないが、「生成変化」・「戦争機械」・「逃走線」等の一連の諸概念がこれに当たる。

銘記すべきは、D&G が『千のプラトー』においても資本主義の只中に可能性を見出す点である。「資本主義は・・・その公理系を逃れる流れを全方向に発生させずにはいない」とする D&G は、「決定不可能な命題」という論点を提出し、こう言う。「我々が＜決定不可能な命題＞と呼ぶものは・・・システムが接合するものと、それ自体連結可能な様々な逃走線に沿ってシステムから逃れ続けるものとの共存であり、分離不可能性である。決定不可能なものは優れて革命的決定の萌芽であり、場である。」或いは、「資本主義が脱コード化され脱領土化された流れを＜接合＞する時には必ず、流れは更に遠くへ行き・・・新たな大地を描き戦争機械を構成する＜連結＞へと入ろうとする。こ

の戦争機械の目的は・・革命的運動（流れの連結・数えられない集合の構成・全ての者のマイナー生成）である」と言われる。（“Mille Plateaux” 以下【MP】 p. 590）

この引用部は「戦争機械」・「マイナー生成」・「大地」等の D&G 独自の新奇な概念を含み容易に理解を許すものではないが、本稿の論脈では差し当たり、資本主義がいかにか「接合」や「公理系への回収」の運動を行うとしても、まさにその運動の中に「更に遠くへ行く流れ」や「システムから逃れ続けるもの」が不可分的に生じると D&G が考えていた点のみを押さえておけば良いだろう。

以上、D&G の資本主義論の概略を踏まえた上で、以下では、1) D&G による資本主義批判の特徴、2) D&G による資本主義理解の位置付け、3) D&G による資本主義批判の意義と課題、について順に検討を加えていくこととしよう。

## 2. D&G による資本主義批判の特徴

D&G による資本主義への批判的スタンスは一見明らかだが、【Patton2012】が整理するように、D&G の政治性は様々な解釈を喚起している。<sup>ii</sup>彼らの政治性をどう評価し、その資本主義批判の特徴をどう見積もるべきだろうか。

政治性の評価について特に問題とされがちなのは「脱領土化の更なる進展」の含意についてだが、興味深い解釈は【Garo2008】<sup>iii</sup>のもので、「他の生産様式が遠望されねば論理的には可能性として現行システムの果てまで進む必要がある。そこから商業的流れの脱領土化への弁明が生じる。この過程は現代世界の経済・金融規制緩和の流れに明瞭な表現を見出す」とする。他方【Choat2009】<sup>iv</sup>は「ドゥルーズをハイエクら新自由主義と繋げる者もいるが、誤り」だと対立的解釈を提出している。本稿としては、D&G の著作全体の調子や政治的発言を見る限り、彼らが（特に 70 年代半ば以降の）ネオリベリズムの支持者だとは判断できないにせよ、(D&G 概念全般に言えるが)「脱領土化」概

念が多様な文脈に適用され一義的理解を許さない点にも解釈上の問題が生じる一因があると指摘しておきたい。その上で、D&G が「金融資本の流れ」を肯定的に捉えるように読める箇所がある点<sup>v</sup>、金融資本への理論的注目が高まる中、D&G の議論の妥当性を再検討する必要がある点も、合わせて指摘しておこう。

本稿の論脈では D&G の政治的立場全般よりも寧ろ、彼らの資本主義批判の特徴を把握する必要があるが、ここで D&G の資本主義批判の在り方の理解に際し有益なものとして【Lenco2011】の解釈に注目したい。【Lenco2011】<sup>vi</sup>は、「個人的意見を表現するドゥルーズとドゥルーズ哲学とを区別する」ことで、一貫性を欠くように見える「二人のドゥルーズ」、即ち、「世界人口の四分の三を極端な貧困に放置する資本主義に懸念を表明し、哲学は人間たることの恥辱の探究だとするドゥルーズ」と、「己に生じることに相応しい者たれと言うドゥルーズ」との一貫性が保持できると言う。これを我々なりに咀嚼し、資本主義を批判する視点の取り方として、「結果からの批判」と「内部からの批判」とを区別してみたい。「結果からの批判」とは即ち、資本主義の齎す悪しき結果（貧困・環境破壊など）に根拠を置く批判であり、理解し易い。D&G もこの視点からの批判を行うが、それに加え「内部からの批判」を提案しようとしており、彼らの資本主義批判の本領は後者にあると言える。それはどのようなものか。

「内部からの批判」を伝統的なマルクス主義的着想で考えてみれば、賃金労働者は、いかに豊かになれども「剰余価値」を資本家に搾取される無力な存在であり、それ故に「不正な体制」としての資本主義が批判される、ということとなろう。然るに、D&G のマルクス及びマルクス主義諸理論に対する立場は様々な解釈の並立を許すほど錯綜しており、例えば「剰余価値」・「搾取」・「階級」等の概念について彼らが施した更新作業等を、伝統的マルクス主義との距離を見積もりつつ再検討

する必要がある。但しここでは結論的に、D&Gによる「内部からの批判」は、マルクス主義的批判のように正義や不正義という概念に依拠する議論ではない点を指摘するに留め、先に進もう。

筆者なりに表現すれば、D&Gによる「内部からの批判」は、「資本主義による解放の不十分さ」の認識の下、「人間の更なる解放や別の存在の仕方の可能性」を示すことで資本主義を批判するものである。D&Gはこの批判を概念創造という形で展開する。

具体的にこれが意味するのは、『アンチ・オイディプス』での「脱領土化の更なる進展」という聊か曖昧な主張が、『千のプラトー』では「資本主義の公理系を逃れる流れ」や「革命的運動」としての「流れの連結・数えられない集合の構成・全ての者のマイナー生成」等の表現へと継承されつつ、様々に新奇な諸概念（「生成変化」・「戦争機械」・「逃走線」等）が創造されることで発展を遂げたということである。標語的に纏めれば、D&Gによる「内部からの資本主義批判」は、諸概念を創造する政治的存在論の展開によって果たされる、と言える。この資本主義批判の持つ意義と課題を検討する前に、次節では D&G の資本主義理解の現時点からの位置づけを行おう。

### 3. D&G による資本主義理解の位置付け

現代の資本主義は、マルクスが示唆した「資本の下への社会全体の実質的包摂」が到来した時代だとの認識を持つ論者は多い。筆者が見るところ、D&G は「実質的包摂」なる表現は用いないが、この状況を既に 1970 年～80 年の時点で理解していた。「実質的包摂」に関しては「労働の在り方」・「賃金労働者の包摂のされ方」・「主観性の生産の生産力化」の三点の状況理解が重要である。

一つ目の「労働の在り方」について【Thoburn2003】<sup>vii</sup>は、「実質的包摂」状態では「労働と社会生活が大規模産業の複雑な機械的過程に包摂され変形され」、「支配的力や統一性は労働の

リズムではなく資本自体のリズムとなる」と言う。この点について D&G は既に『アンチ・オイディプス』で、人間が（日常的意味での）「機械」と一体化し（D&G が独自に定義する）「機械」の付属物となり、資本のリズムに従い生産するという認識を示していた。<sup>viii</sup>また、『千のプラトー』で描写される「機械的隷従」状態では、「人間自らが・・・人間同士で、或いは他のものと共に構成する機械の構成部品となり」、「サイバネティックスとコンピュータ」の時代に人間と機械は「相互に内的にコミュニケーションする関係」にあると規定されていた。（【MP】 p. 570–572）。

二つ目の「賃金労働者の包摂のされ方」について【ロルドン 2012】<sup>ix</sup>は、「実質的包摂」とは「資本蓄積の論理の為に人間の全生活を従属させること」であり、「賃金労働者の精神の完全な植民地化、労働者の感情や行動的潜勢力を全て動員しようとする企て」だと言う。D&G は、この包摂や動員において貨幣が主観性に対し決定的影響力を持つと理解し、マルクス貨幣論・信用論への回帰を主張していた。『アンチ・オイディプス』で彼らは、「欲望の統合が為されるのは・・・貨幣の流れの次元において」であり、融資の流れと支払手段の流れという異質な二つの流れが貨幣という一つの尺度で測られる点に資本主義の最大のトリックがあると看破していた。（【AO】 p284, 271）<sup>x</sup>

三つ目の「主観性の生産の生産力化」について【Read2003】<sup>xi</sup>は、「主観性の生産自体が資本にとり生産的となる」時代を我々は生きていと述べ、資本は「直接に生存の特異性と共同性を捉えようとする」と言う。これはつまり、我々が労働者としてのみならず特定のライフスタイルや美意識・価値観を持つ生活者・消費者としても生産性を持つ時代に生きてることを言うものであり、消費者参画型の商品開発や、特定の美意識や趣味嗜好等の商品化過程を思えば了解される認識だろう。或いは人間の実存的特性（コミュニケーション能力、愛想の良さ等々）が生産力となり企業活

動にとり不可欠となる事態を想起しても良い。この点について D&G は、聊か曖昧だが「余剰労働、資本主義的組織の総体は徐々に労働の物理社会的概念に対応する時空の条里化とは無縁になりつつあり、「資本主義は労働量に対してよりも複雑な質的過程に作用し、この過程は交通手段、都市モデル、メディア、レジャー産業、知覚や感じ方などの全記号系に関わるものとなりつつある」と述べていた。【MP】 p. 614)。

以上より、マルクスが「実質的包摂」という言葉で示唆し、現代の理論家はその内実を検討しつつある資本主義の現代的状態を D&G が時代に先駆けて(時に断片的示唆に留まるものの、)認識していた点が確認された。次に、D&G 以外の論者も参照しつつ、彼らの為す政治的存在論の展開による資本主義批判の意義と課題を検討しよう。

## 4. D&G による資本主義批判の意義と課題

### 4. 1 D&G 哲学以外の資本主義批判理論との関係

「生成変化」・「戦争機械」・「逃走線」等の新奇な諸概念の創造により展開される D&G の政治的存在論については、「政治の新たな実践手法を与える」とする解釈や (J.Read)、「資本に相応しい発明の政治」(N.Thoburn) ・「マルクスのでもなくリベラルでもない新たなユートピア的政治」(P.Patton) を産み出した、とする解釈などの肯定的評価もある一方、その意義を評価しない論者もあり、価値評価が難しい状況が続いている。

本稿ではここで、現代を代表する資本主義批判の理論家ネグリ&ハートと経済地理学者ハーヴェイの議論とを参照してみたい。筆者の見るところ両者は、資本主義批判に向かうグローバルなレベルでの同盟や運動の必要性を強調する点では共通している。例えばネグリ&ハートは現在のグローバル秩序を独特の観点から「帝国」と捉え、その対抗者として「帝国を維持する生産力であると同時に、その破壊を呼び求め必然的なものとする力」

である「マルチチュード」という形象を提出し、それを主体としつつ「グローバルな次元で何らかのオルタナティブを提示することが必要」だとする<sup>xiii</sup>。他方、ハーヴェイは D&G の概念(「アサンブラージュ」)に言及しつつ、社会を「多くの様々な種と活動形態から成る生態系に似た」、「資本主義の歴史的進化の中で様々に共進化する」7つの活動領域の弁証法的絡み合いと捉える。その上で「共進化するシステム内部の全活動領域が何らかの形で連動して動く場合にのみ、資本主義的支配とは大きく異なる全面的な革命の変容を我々は語りうるだろう」と述べ、「その周囲に社会行動が結集し回転する共革命的な諸ポイント」としての「共通の目標」・「一般的な指導原則」が必要だと主張する。<sup>xiiii</sup>彼らの立場から見ると、D&G の議論は「具体性の不足」や「グローバルな秩序の忘却・ローカルで特殊なものへの執着」により不十分なものとされることとなるが、この批判をどう捉えるべきだろうか。

畢竟、問題は D&G が理論構築した時代から 30~40 年の時が流れ、マイナー性やミクロ性を強調し、部分的変革実践を肯定する D&G の姿勢が時代遅れの抵抗戦略となってしまったのかどうか、という点にある。「マイナー性・ミクロな部分的変革実践」として近年の D&G 研究者が挙げる具体例は、「マッドサイエンティスト、新たなサブカルチャーや対抗文化イノベーション、社会的政治的危機」(【Thoburn2003】 p. 98)、「1980 年代の自由ラジオ、1960~70 年代のコミュン、インターネット」(【Pellejero2009】 p. 108) 等である<sup>xiv</sup>。ポイントはこれらの「オルタナティブな活動や空間」が暫くの間、資本主義的生産に組み込まれないとされる点にあるのだが、この点については、「オルタナティブはたちまち資本主義的再生産の支配的実践に再吸収されてしまう」故に、寧ろ「支配的実践がいかに機能するかを明瞭に暴露すること」が重要だとするハーヴェイのような立場もあれば (【Harvey2011】 p. 242)、近年活発な「オルター・

グローバリゼーション運動」(以下 AGM) と D&G 哲学との繋がりを指摘し肯定的に評価する論者も散見される (【Lenco2011】 p. 164 など)。

これらの問題系について本稿では最終的結論を下すことはせず、理論的に以下の二点のみを指摘しておきたい。一点目として、ハーヴェイの言う「オルタナティブな空間」の「支配的実践への再吸収」の分析に関しては、D&G が『千のプラトー』で構築する「捕獲装置」概念を改鑄しつつ理解の深化に貢献できると推測される。二点目として AGM に関しては、それが D&G の組織論や同盟論と正確にはいかなる関係を取り結びうるか、個別現象に関する経験的調査を織り込みつつ、探究する必要がある。

以上の、他の理論家からの D&G 評価と検討課題を踏まえつつ、次に「資本主義への抵抗」の意味について検討しよう。

#### 4. 2 「資本主義への抵抗」の存在論的基礎付け

現在の資本主義社会の状況は、見方によってはかなり切迫しており、絶望的状況だとの認識もある。D&G が「実質的包摂」状態を予感的に認識していた点は先に述べた通りだが、マルクス主義的伝統に D&G 以上にコミットする【Read2003】はこの段階に至り、「一方で資本がますます生ける労働の協働的ネットワークに依拠する限りで主観性は最大限の力を持つが、他方で協働的力がたえず資本の力と見なされる限りで最大限の従属下に置かれる」と言う (p. 18)。現在、資本と労働との対立の緊張度は増している。【Read2003】はこの「矛盾を様々な角度から検討し、新たな概念を産み出すに至るまでその発展の流れを追うこと」を提案するに留まるが (p. 151)、ネグリ&ハートはこの「共産主義への潜勢力」としての主観性に賭ける立場だと言えるだろう。

他方、D&G 研究者の中には、現代の資本主義と D&G 哲学の根本論理との親和性が高まってきた

点を指摘する論者が散見される (【Thoburn2003】、【Lenco2011】等)。特に【Albetsen&Diken2006】<sup>xv</sup>は、「資本主義の新たな精神」を「プロジェクトの体制」と名指し、それは「ネットワーク的モビリティ・・連結主義に価値を与え」、「受動性に対し能動性、同質性に対し異質性、固定化と規則に対し創造的变化を重視する」もので、「かつて資本主義を批判しえたく批判」は、いまや資本主義的イノベーションに貢献している」と言う。D&G 自身が既に『哲学とは何か』において、彼らの哲学の核を為す「概念」と「出来事」がマーケティングに略取されたと嘆いていたが<sup>xvi</sup>、「権力自体がノマド的に振る舞う時代」(【Albetsen&Diken2006】 p. 245)、「資本主義も国家も平滑空間を基礎として作動する」時代 (【Escobar&Osterweil2012】 p. 202) <sup>xvii</sup>に、いかなる形で「資本主義への抵抗」が可能だろうか。

【Vahamaki&Virtanen2006】<sup>xviii</sup>は、D&G のプロジェクトを「資本主義の革命の変容の形而上学」だと表現する。筆者はこれに概ね賛同するが、聊か「形而上学」という言葉の意味を鮮明に捉え難い為、D&G 哲学は「資本主義への抵抗」に関する「存在論的基礎付け」を与えようとする議論だと表現したい。しばしば指摘されるように、D&G の議論は、歴史的具体的事象を分析する側面とより抽象的な存在論を語る側面との混合体として成立している。これは資本主義論の文脈に即して言えば、グローバル資本主義に関する歴史的具体的分析と、資本主義社会に関する抵抗を基礎づける存在論との二つを D&G が提出していることを意味する。ドゥルーズの、歴史の時間上に生じる「革命」ではなく、人々の「革命一生成」を信じるという発言の趣旨もこの文脈で捉えられねばならない。<sup>xix</sup>但し逆に言えば、特定の歴史状況における個別行為者が持つべき抵抗戦略を一般的な形で提示することを彼らはしないし、できない。例えば D&G は賃金労働者が「資本の平面」から逃れる時に革命的になると言うが (【MP】 p. 589)、その手

法の具体的提案はない。貨幣を通じた資本主義への欲望の備給をいかに解除するか等の問題についても、D&Gに明瞭な解答は期待できない。代わりに提示されるのは、自分自身の「領土」や「地層」の中から慎重に「逃走線を描くこと」や「多様体を創ること」という、聊か抽象度の高い呼びかけに留まる。彼らは言う。「我々が為すべきことがここにある。即ち一つの地層に身を落ち着けること、それが我々に与える機会を用い実験すること、そこに望ましい場所や脱領土化の運動、可能な逃走線を探すこと、また、其処此处で流れの結合を見出し確かなものとする、部分ごとに強度の連続体を試みること、常に新たな大地の小片を獲得すること。」(【MP】 p.199)

このような「資本主義への抵抗」に関する「存在論的基礎付け」の議論がいかなる意味を持つかは、最終的にはそれを解釈し利用する者の立場により変動すると言える。筆者は考えている。議論の抽象度の高さと具体的目標の不在を以てその無効性を強調する立場もありうるだろう。しかし本稿としてはなお、彼らの抽象的議論をなるべく具体的な方向で継承・発展させる為の方向性と課題を見定めたい。必要となる作業は、D&Gによる「多様体の存在論的優位性」という認識、及び「生成変化」の内実、これら二つに関する現時点での議論状況の把握と課題の見積もりとなる。

#### 4. 3 「多様体の存在論的優位性」と「生成変化」に関する議論状況と課題

まず、「多様体の存在論的優位性」というD&Gの社会認識の核心については、ここで詳細に論ずる余裕は無いが、資本主義批判という文脈で言えば、冒頭にも述べたように、D&Gが資本主義による「公理系への回収」の運動の只中に「システムから逃れ続けるもの」が不可分的に生じ続けると考えていた点が、この認識に該当する。

具体的場面に引き寄せた興味深い議論は、【Lazzarato2004】のものである<sup>xx</sup>。彼によると、

現在の資本主義企業は多様体が行う協働作業を搾取する。例えばソフトウェア開発において企業は、開発者達の産出した共同財を知的所有権の論理の下で搾取し、利益を挙げている<sup>xxi</sup>。ポイントは、企業により捕獲される前に多様体（無数のプログラマーの協働的ソフトウェア開発作業）による創造行為が可能であることである。この協働作業が企業の論理に従属させられることで、発明者達の多様体の行動力が制限され、協働に伴う喜びの感情も損なわれていると言う。翻って【Lazzarato2004】は、このように貧弱化された在り方から抜け出て、「雇用への従属から逃れる新たな活動様式の発明」や、「発明を企業価値ではなく共同財の創造と実現の為に用いること」を提案しつつ、その為には「新たな権利」を巡る闘争も必要だと言う (p. 141)。

この議論は確かに、D&G哲学の方向性を独自に展開しているものである。但し、「搾取の在り方」や「協働の喜びの感情」が企業への捕獲により損なわれているという理解については、より詳細な内実の検討が必要であろう。【Lazzarato2004】以外、「多様体の存在論的優位性」という命題を資本主義批判の文脈で具体的に展開した論者は管見の範囲では見当たらない。そこで、「多様体の捕獲」の他の事例の探究が必要ともなるが、他方で理論的には、『千のプラトー』における「労働」と「自由活動」との対比的理解を提出する場面の再検討が必要である。D&Gによれば、「国家こそが様々な活動の比較基準としての労働を産み出す」のであり、測定され交換されない活動が「非生産的労働やレジャー活動」と位置づけられる。「余剰労働が存在しないところには労働モデルも存在せず、自由活動の連続変化があるのみだ」とする彼らの議論は、国家と貨幣及び抽象労働との緊密な関係を幾つかの論拠を基に指摘しているが、この議論の有効性は未知数である。再度この議論を洗い直し、現代の労働論や搾取論とも対比させつつ、労働として捕獲されない自由活動の内実を明らかに

し、それと多様体概念との関連性をも明瞭化する必要がある（【MP】 p. 551-552, p. 611-614）。

次に「生成変化」については、「マイナー生成、女性一生成、分子一生成、革命一生成」などから構成されるこの概念が捉え難いのは確かだが、或る程度の共通了解は形成されてきている。まず確かなのは、それがメジャーな基準からの逸脱を含む点であり、この点を強調する論者も散見される。<sup>xxii</sup> 但しやはり最も重要なのは、【Sibertin-Blanc2013】<sup>xxiii</sup>が言うように、この運動が様々な二項対立を揺るがす「新たな生存様式の発明」へと繋がる点である。ここでは「その闘争の実践的スタイル・設定する問題などの内在的評価」が必要ともなる（【Sibertin-Blanc2013】 p.222）。

「生成変化」は誰にでも開かれている。【Roffe2007】<sup>xxiv</sup>の整理を借用すれば、それは「脱個体化」とそれに引き続く「世界における新たな存在の仕方・集团的主体性」の構成から成る。重要なのは、この過程が個人の意志を超えた出会いを契機として始まり「潜在性を掴むこと」と表現される点である。「出会われるもの」である「出来事」に関しては、かつてよりその内実に関する解釈問題が存在するが<sup>xxv</sup>、いずれせよ「生成変化」が意志されざる形で始まることは動かない。また、「潜在性を掴むこと」については様々な表現が可能だろうが、想像力が描き出す可能性を未来へと投射しその実現を図ることではなく、変容への可能性を「今・ここ」にある潜在性の中に見出すことなどは少なくとも言えよう。【Lenco2011】はそれを、「社会的地平に浸透する内在的関係性を再び作動させることへの感性」と表現している（p. 181）。

こう規定される「生成変化」は、その非意志的かつ偶然的な始まり方・展開される集团的主体性に関する価値評価の難しさ・大局的状况に及ぼしうる影響力の未確定性などを理由に批判されうるし、現時点での資本主義批判に向けた戦略として最適なものか否かに関する議論も可能ではある。

但し D&G のこの議論が、各個人がいかなる状況に置かれていても、各人が在るその場所に潜む潜在性からの抵抗や創造が可能であることを原理的次元で描き出した意義は、資本主義社会が今後いかなる変貌を遂げようと、意味を持ち続けると言えるのではないだろうか。この意味で、D&G の議論は「資本主義への抵抗」に「存在論的基礎づけ」を与えるものだと言えるのではないかと筆者は考えている。この根本的論点を押さえた上で、「生成変化」に関しては、具体的な資本主義社会の現状を凝視しつつ、更にその細部、即ち、「生成変化」に伴う感情や情動の問題<sup>xxvi</sup>、労働現場における「生成変化」の可能性の問題<sup>xxvii</sup>、同盟の構成の問題<sup>xxviii</sup>、グローバル資本主義へ与える影響の問題等を今後、検討していかねばなるまい。

## 5. 終わりに

本稿では、筆者自身の力で今後、資本主義社会を批判的に思考し直す為の準備作業の意味を込めて、(特に本国フランスよりも活発に研究書が出版されている英語圏の) 先行研究・解釈を広く渉猟しつつ、D&G の資本主義論を再検討し、彼らの資本主義理解や資本主義批判が現在の理論状況から見ていかに位置づけられるかに関する理解を提出すると同時に、今後の検討課題を抽出してきた。

以下、本稿での考察の成果を改めて纏めることで、結論に代えたい。1) D&G による資本主義に関する「内部からの批判」の意味が明瞭化された。2) D&G による資本主義の「実質的包摂」段階に関する先駆的認識の存在が明瞭化された。3) D&G の資本主義批判が資本主義への抵抗に対し「存在論的意味付け」を与えるという理解が提出された。4) D&G による資本主義批判を継承・発展させるべく「マイナー性・部分的変革実践」、「多様体の存在論的優位性」、「生成変化」について具体的な歴史的社会的現象への参照も行いつつ、検討を加えていく必要があるとの認識に到達した。<sup>xxix</sup>

---

註

- i “ L’anti-Édipe ” ,Gilles Deleuze&Félix Guattari,Les Éditions de minuit,1972, “Mille Plateaux”, Gilles Deleuze&Félix Guattari,Les Éditions de minuit,1980
- ii 【Patton2012】 “ Deleuze ’ s political philosophy” ,Paul Patton, in “The Cambridge Companion to Deleuze” , Daniel W. Smith & Henry Somers-Hall ed., Cambridge University Press, p.198-199
- iii 【Garo2008】 : “Molecular Revolutions: The Paradox of Politics in the Work of Gilles Deleuze” ,Isabelle Garo, in “ Deleuze and Politics” ,Ian Buchanan & Nicholas Thoburn, Edinburgh University Press,p.61
- iv 【Choat 2009】 : “Deleuze, Marx and the Politicisation of Philosophy” , Simon Choat, in “ Deleuze and Marx”, Dhruv Jain ed., Edinburgh University Press,p.17
- v 「宇宙の極限に支配者のイメージや国家の観念、秘密政府の観念を投影する時、人は滑稽かつ虚構的な表象に陥る。国家よりも株式市場の方が、流れとその量子についてはるかに適切なイメージを与える。」(【MP】 p.276)
- vi 【Lenco2011】 : “Deleuze and World Politics: Alter-Globalizations and Nomad Science”, Peter Lenco, Routledge,p.176
- vii 【Thoburn2003】 : “ Deleuze, Marx and Politics” ,Nicholas Thoburn, Routledge,p.78
- viii 「資本主義の独自性は社会機械が不変資本として社会体の充実身体に付着する技術機械を部品とし、技術機械に付属する人間を部品としない点にある」(【AO】 p.299)。
- ix 【ロルドン 2012】 :『なぜ私たちは、喜んで“資本主義の奴隷”になるのか？新自由主義社会における欲望と隷属』(F・ロルドン著/杉村昌昭訳、作品社) p.10-12
- x ドゥルーズが晩年、現代の賃金労働者が己の活躍や昇進に向けての動機付け・研修・生涯教育を求める欲望を持つ点に注目し、感情や動機等の主観的観点からの資本主義への欲望の備給に言及した点も想起したい。“Pourparlers”, Gilles Deleuze, Les Éditions de minuit,1990,p.242-243 (以下【PP】と表記)
- xi 【Read2003】 : “The Micro-Politics of Capital — Marx and the Prehistory of the Present” ,Jason Read, State University of New York Press,p.136,p.151
- xii【Negri&Hardt2000】: “Empire”, Antonio Negri & Michael Hardt, Harvard University Press P.61-62, p.206
- xiii 【Harvey2011】 : “The Enigma of Capital and the Crises of Capitalism” ,David Harvey, Profile Books, p.128,p.207,p.230-231
- xiv 【Pellejero2009】 : “Minor Marxism: An Approach to a New Political Praxis” ,Eduardo Pellejero, in “Deleuze and Marx”, Dhruv Jain ed., Edinburgh University Press
- xv 【Albetsen&Diken2006】 : “Society with/out Organs”, Niels Albetsen & Bulent Diken, in “Deleuze and the Social” ,Martin Fuglsang & Bent Meiner Sorensen ed., Edinburgh University Press,p.245-247
- xvi “Qu’est-ce que la philosophie?” , Gilles Deleuze&Félix Guattari,Les Éditions de minuit,1991,p.15
- xvii 【Escobar&Osterweil2012】 “Social Movements and the Politics of the Virtual: Deleuzian Strategies”, Arturo Escobar & Michal Osterweil, in “Deleuzian Intersections: Science, Technology, Anthropology”, Casper Bruun & Jensen Kjetil Rodje, Berghahn Books
- xviii 【Vahamaki&Virtanen2006】 : “Deleuze,Change,History”, Jussi Vahamaki & Akseli Virtanen, in “Deleuze and the Social” ,Martin Fuglsang & Bent Meiner Sorensen ed., Edinburgh University Press,p.213
- xix 「革命の先には悪しき未来があるとされます。しかし人は二つの事柄、即ち、歴史の内部における革命の未来と、人間の革命一生成を混同しているのです。・・人間の唯一の可能性は革命一生成にある。恥辱を払い、耐え難いものに応答するのは革命一生成以外にはありません。」(【PP】 p.231)
- xx 【Lazzarato2004】 : “Les révolutions du capitalisme” , Maurizio Lazzarato, Les Empêcheurs de penser en rond
- xxi 【Lazzarato2004】 p.118-119 「マイクロソフト社の活動は、多様体による共同的創造や共同的実現を無力化し停止させることにある。アジャンスマンの力能が・・企業の中に囲込まれている。」「共同的創造と共同的実現の力の無力化と捕獲は知的所有権に依拠している。」
- xxii 【Albetsen&Diken2006】 は「ドゥルーズ的な逃走線」を、「逸脱としての速度」・「必ずしも運動を伴わない逸脱」と表現する。(p.247)
- xxiii 【Sibertin-Blanc2013】 : “Politique et État chez Deleuze et Guattari :Essai sur le matérialisme historico-machinique ” ,Guillaume Sibertin-Blanc, P.U.F. 「マイナー生成の過程は



---

単なる逸脱ではない。カテゴリー化不可能なもの、数えられないものに場所を与え、二項対立を揺るがす。」(p.199)

xxiv 【Roffe2007】: “The Revolutionary Dividual”, Jonathan Roffe, in “Deleuzian Encounters : Studies in Contemporary Social Issues” ,Anna Hickey-Moody & Peta Malins,p.43

xxv 【Vahamaki&Virtanen2006】はこの周辺の状況について、「革命は我々が見たり経験したりした不正からは生じない。それは集中というよりは集中の失敗、放心状態を通して生じる」との興味深い解釈を提出している。(p.226)

xxvi【Goodchild1996】: “Deleuze and Guattari: An Introduction to the Politics of Desire” ,Phillip Goodchild, Sage Publications,1996 は、現在の資本主義社会が社会全体に瀰漫させる不安や恐れに感情的に批判的に言及し、対比的に「喜び」の経験や体制への可能性を探究している。

xxvii 【Goodchild1996】の、「集団的労働経験は集団的意識の革命の変容を産み出しマイクロ政治的実験により連帯を産み出せる場所である」という命題の意義を、現在の労働の現実や理論を踏まえつつ見極める必要がある。

xxviii 【Sibertin-Blanc2013】は「マイナー生成の問題は最終的には同盟の構成の問題となり、この議論は・・＜強度的普遍性の実践＞を思考させる」(p.224-225) と言う。

xxix 資本主義批判に向けての更に詳細な検討課題を列挙する。1) マルクス主義的諸概念(剰余価値・搾取・階級等)による資本主義把握と批判の有効性の再検討。2) D&Gによるマルクス主義的諸概念の更新の再評価。3) 『千のプラトー』における「国際化された資本主義」分析の現時点での妥当性と有効性の検討(銀行・金融権力の位置付け等)。4) 貨幣の機能や現代的労働形態(非物質的労働・感情労働等)の議論を踏まえた上での、賃金労働者の持つ可能性の検討。5) 『千のプラトー』で創造される諸概念(マイクロ政治・生成変化・戦争機械・逃走線等)の構築のされ方の再把握と、各概念の応用可能性の検討。6) D&Gと他の理論家の議論との資本主義批判に関しての接続可能性の検討(ネグリ&ハート、ハーヴェイ、ジジェクら)。7) 現代の資本主義に見合う形での「多様体の捕獲装置」概念の改鋳作業。8) 「労働/自由活動」概念の再検討と、「自由活動」の持つ現代的可能性の見極め。9) AGMとD&G哲学との関係性を見極め(「同盟」概念の再検討)。10) 「生成変化」における「潜在性を掴むこと」の内的構成の更なる明瞭化。11) 「共同財」や「新たな権利」を巡る問題の検討。